



## 第19回 BC州日本語弁論大会

2007年3月17日(土)

SFU・Halpern Centre

### 優秀作品集

BC州日本語弁論大会実行委員会

この作品集は、参加者の原稿を元にBC州日本語弁論大会実行委員会が編集したものである。

## 第19回BC州日本語弁論大会

日時：2007年3月17日 土曜日 午前10時00分

場所：SFUハルパーンセンター

コーディネーター：Rebecca Chau (UBC/ブリティッシュコロンビア大学)

Noriko Omae (SFU/サイモンフレーザー大学)

司会者：Mark Wisniewski (Centre for Intercultural Communication, UBC)

審査員：Yukiko Shiroki (Sentinel Secondary)

Karen Eden (Burnaby South Secondary)

Keiko Koizumi (UBC)

Isao Ebihara (JALTA)

Akihiro Morimoto (Global Partners Institute)

Matthew Yoshitake (Kiyukai)

Tsuyoshi Kawasaki (SFU)

Kazuko Trudel (UBC)

Rose Mohoruk (Douglas College)

Katsuyuki Araki (Konwakai)

Seiichi Otsuka, Consul General of Japan

出場者：

【高校 初級】

- |                  |                                    |
|------------------|------------------------------------|
| 1 EunMin Kim     | おもいでのほこ Memory Box                 |
| 2 Heather Kim    | おばあさんのなみだ Grandma's Tears          |
| 3 Daniel Lee     | 僕の夢 My Dream                       |
| 4 Ginny Leung    | シャロン Sharon                        |
| 5 Min-Young Shin | わたしのひとりだち Learning of Independence |
| 6 Sunny Wong     | 子供の感じ Children's Feelings          |

【高校 中級】

- |                 |                                     |
|-----------------|-------------------------------------|
| 1 Janice Cho    | (アイ・ディー) iD                         |
| 2 Esther Chun   | 自信を持つことの大切さ Confidence              |
| 3 SoHee Hong    | わすれがたい体験 Unforgettable Experience   |
| 4 Jacob Park    | 父の遺伝子 My Father's Gene              |
| 5 Peggy Tsai    | なぜ表参道 Why I like Omote Sando        |
| 6 Elizabeth Yau | 一人でいる意味 The Meaning of Living Alone |

【高校 オープン】

- |                   |   |
|-------------------|---|
| 1 Misato Hamanaka | 1 リットルの涙 1 Litre of Tears                         |
| 2 Irene Hong      | 私はその気持ち分かるから<br>Because I Know What It Feels Like |
| 3 Yumin Huang     | また、一から ... From the Beginning                     |
| 4 Cindy Kao       | ミニ・ジャパン Mini Japan                                |
| 5 Sera Ok         | 魔法の本 A Magic Book                                 |

【大学・一般 初級】

- |                      |   |
|----------------------|---|
| 1 Marita Dautel      | 小さな輪から To begin with the Small                        |
| 2 Arc Han            | 大原を訪れて My Experience of Visiting Oohara               |
| 3 SuBi Park          | ブレイク・ザ・「偏見」 Break the Bias                            |
| 4 Gustinanto Tjandra | まよわせる言葉 Puzzling Language                             |
| 5 Jia Yun Yan        | 私の将来の家族と日本文化<br>My Future Family and Japanese Culture |

【大学・一般 中級】

- |                    |   |
|--------------------|---|
| 1 Ji Hyun Hwang    | 有名人の自殺 Suicide of Celebrities                     |
| 2 Hyungbin Kim     | 軍隊 Military Service                               |
| 3 Connor Mayer     | 外来語拒否症 Foreign Word Rejection Syndrome            |
| 4 Carmen Tsin      | 竹富島の体験 Taketomi-Jima                              |
| 5 David Van Vloten | 自分のい場所 The Place I Belong                         |
| 6 Emily Yu         | 大自然がくれたプレゼント<br>The Present Mother Nature Gave Us |

【大学・一般 上級】

- |                  |  |
|------------------|--|
| 1 Paulina Chiang | 日本食というのは？ What is Japanese Food?                   |
| 2 Jinhwan Kim    | 敬語は必要か Is Honorific Necessary?                     |
| 3 SooKee Kwon    | 空手と私 Karate  |
| 4 Kelly Liang    | ポップカルチャー国策<br>Popular Culture as a National Policy |

【大学・一般 オープン】

- |                |                              |
|----------------|------------------------------|
| 1 Won Joon Kim | いじめ、カッコ悪い Bullying, Shameful |
|----------------|------------------------------|

【高校部門】

初級部門	第1位	Heather Kim	「おばあさんのなみだ」 (さいたま・ナナイモ友好都市賞)
	第2位	Ginny Leung	「シャロン」
	第3位	EunMin Kim	「おもいでのはこ」
	特別賞	Daniel Lee	「僕の夢」
中級	第1位	Jacob Park	「父の遺伝子」 (さいたま・ナナイモ友好都市賞)
	第2位	Esther Chun	「自信を持つことの大切さ」
	第3位	Elizabeth Yau	「一人でいる意味」
オープン	第1位	Irene Hong	「私はその気持ちが分かるから」 (さいたま・ナナイモ友好都市賞)
	第2位	Cindy Kao	「ミニ・ジャパン」
	第3位	Misato Hamanaka	「1リットルの涙」
	特別賞	Yumin Huang	「また、一から…」

【大学・一般部門】

初級	第1位	Jia Yun Yan	「私の将来の家族と日本文化」 (白老・ケネル姉妹都市賞)
	第2位	Arc Han	「大原を訪れて」
	第3位	Marita Dautel	「小さな輪から」
中級	第1位	Connor Mayer	「外来語拒否症」(白老・ケネル姉妹都市賞)
	第2位	Emily Yu	「大自然がくれたプレゼント」
	第3位	Hyunbin Kim	「軍隊」
	特別賞	Ji Hyun Hwang	「有名人の自殺」
上級	第1位	Paulina Chiang	「日本食というのは？」(YOKE賞)
	第2位	Kelly Liang	「ポップカルチャー国策」
	第3位	Jinhwan Kim	「敬語は必要か？」
	特別賞	SoonKee Kwon	「空手と私」
オープン	特別賞	Won Joon Kim	「いじめ、カッコ悪い」

## おばあさんの涙

Heather Kim

私は子供の頃、私より兄ばかりをかまううちのおばあさんを見て、不公平だと、思っていました。その頃とても利己主義で自分勝手な兄をおばあさんはすごく可愛がっていて、私はいつも兄の次でした。共働きで忙しい両親も私を全然かまってくれませんでした。

幼稚園の時、雨の中迎えにきたお母さんと一緒にうちにかえる友達に比べ、私はいつも一人でした。ピアノ教室から帰ると「おかえり」の言葉一つなく兄に腕枕をして昼寝をしているおばあさんを見ました。

そうしているうちに、私は七歳になって、ちから少し離れた私立の学校に入りました。ある日、学校が終わっていつものスクールバスに乗ると、運転席に知らないおじさんが座っていました。おじさんに私の住所を言うと反対側のバスだと言われました。とても不安でしたが言われた通りにしました。バスは全く知らない通りを過ぎ、一時間後にはまた学校に戻っていました。涙を拭きながら、うちに向かい歩き始めました。道が合っているかどうか分からなかったけれど「それがどうだっていうの」と思いました。どっちみち、うちの家族は誰も私を探さないだろうから。涙で顔が腫れてしまいました。

信号を待っていると、向こう側にしわだらけのおばあさんが見えました。「おばあちゃん!」信号が青に変わりお互いに向かって走り出し、抱き合って泣きました。「おばあちゃん! おばあちゃん!」まるで赤ん坊のようにおばあさんと呼びました。その時、私は最初で最後のおばあさんの涙を見ました。兄がサッカーで骨を折った時も見せたことのない涙です。おばあさんが私のために泣いてくれたことがこんなに私を幸せにしてくれるとは思いませんでした。

おばあさんは今までも兄のことを一番思っているように見えます。でも私は幸せです。一番ではなくても、私も愛されていることに間違いはないからです。

私はもう、それで充分です。

## シャロン

Ginny Leung

私の親友は今ホンコンに住んでいます。小さい頃は、いつも一緒でした。でも、私たちの距離は遠くなっていきそうです。

ホンコンに住んでいた時、毎朝起きて、学校の準備をして、そして、アパートの下でシャロンを待ちました。シャロンは隣のアパートに住んでいて、同じ学校に通っていました。毎日、スクールバスはアパートの前に来ました。私たちはよく、手をつないで、歌をうたいました。バスが来ると、走って、バスに乗り込みました。学校に着くと、私はよくバスからジャンプして、一緒に校舎へ歩いていきました。小さな私立学校なので、みんなが私たちを知っていて、私たちもみんなを知っていました。いつも一緒に遊んでいました。学校が終わってから、シャロンはよく私のうちに来て、テレビを見ながら、絵を描きます。今でも、その日々をはっきりと覚えています。

今、私はカナダに住んでいて、そしてシャロンはホンコンにいます。私はカナダからシャロンに手紙を書いて、そしてシャロンも私に手紙を書いてくれました。でも、だんだんシャロンの中国語の手紙を理解するのが、難しくなりました。私の中国語がついていけないのです。私たちの文化背景と言葉は変わってしまいました。小さい時の私たちの親交はどうなったのでしょうか。兄弟のようだったあの日に帰りたいです。すべて変わって、もうあの頃に戻ることはできません。

夏休みにホンコンへ帰った時、シャロンを呼び出して、アイスリンクで会いました。初め、シャロンは背が高くなっていて、ほとんどシャロンと気づきませんでした。アイスリンクを出て、二人でたくさん話しました。私たちはもう同じ所に住んでいません。また同じ学校に行ってもいけないけれど、楽しく笑って、時間を過ごしました。私はシャロンにティーベアをあげて、シャロンは私にバニラアイスクリームを買ってくれました。

私たちの友達関係はまだ存在しています。遠く離れ、色々変わったけど、小さい時の思い出を忘れられません。私達にとって、あの時は幸せでした。今でも、それは私たちをつないでいます。私達はあの頃の思い出を大事にしましょう。

## 思い出の箱

EunMin Kim

私には思い出の箱がありますこの中には十七年間集めた手紙やカードが入っています。初めのうちは何の理由も無くただ捨てるのが惜しくて集めていたのですが、いつの間にかだんだん増えていきました。ある日部屋の整理をしていると、その箱が目につきました。箱の中には幼稚園の時もらったバレンタイン・カード、小学校の時のバースデー・カード、中学校の時のクリスマス・カードでいっぱいでした。また、退屈な数学の時間、友達と回したメモから引越しの時もらったクラスメートの手紙までありました。

その手紙の名前を見ても顔も思い出せない人が意外に多く、そうやって私の記憶の中で消えて行くことが何故か怖くなりました。私の存在も同じように忘れられているだろうと思うと、とても寂しくなりました。顔は思い出せない人でも私との思い出が残っているはずなのに何一つ記憶に無い自分に腹が立ちました。

また私と特に仲の良かった友達の手紙を見ると、その時の事が思い出され、懐かしくなります。小学校二年の時、仲の良かったエイロンとは毎日お互いの家に行き、夜遅くまで遊んでいたこと、三年の時、隣の席のピョンジュンとは いつも喧嘩しながら遊んでいたことなどが思い出されました。

幼稚園の時、韓国からカナダに留学に着て、小学校二年を終えた頃、韓国に帰りました。そして四年の時、カナダに移住することになりました。引越しが多かったせいか長い間付き合った友達がいません。ずっと友達の間を続けている人を見ると羨ましいです。でもこの中に一杯入っているカードや手紙を見ると心が温かくなります。

私は、このスピーチの準備をしながら箱の中をのぞきました。どんどん増えていく中身を見ながら、これから先会うことになる友達とは貴重な思い出を作っていき、一生大事にして行こう、私はそう決心しました。

## 父の遺伝子

Jacob Park

食事の時、母はよく僕の色々な癖や振る舞いが父とそっくりだと言って笑います。ぼんやり宙を見つめたり、つまらない事を考えて独り言を言ってニタニタ笑ったり、物をよく無くしたり、物忘れがひどい事など数えたら切りが無いようです。でも一つだけ僕は父に、似たくないと思ったところがありました。それは 父の頑固さです。

その 頑固さが原因で父は仕事を失いカナダに来ることになったのです。

十年前、突然父は「来月カナダに行くぞ」と僕たちに告げました。小学一年生の僕は、ショックで泣いて抗議しましたが、父の決意は変わりませんでした。嫌々来たカナダで八才の僕には言葉や新しい文化や友達関係で辛い事が待っていました。

その度に、父に「韓国へ帰りたい」と泣きながら訴えましたが、父は「もっとがんばれ。おまえは、英語を習えてラッキーだぞ。きっと将来役に立つから」と頑な繰り返すばかりでした。

その後、父はカナダで良い仕事が見付からなかったのも日本へ渡りました。どうしても落伍者と言われたくない父は韓国へ帰ることができなかったのです。

一人で父は一週間に六日も働いて収入の60%を僕と母に送ってくれています。父は、一部屋だけの小さいアパートに住んでいて、ほとんど食べることができるくらいのお金しか持っていません。

去年父がカナダに来た時、「ジェイコブ、おまえがおれの人生の全てだ」と言いました。その時、僕は、はっとしました。僕の父の頑固さは、ただマイナス面ばかりでなかったのだと気付いたのです。僕はいつでも父とは違う生き方をしたい。父のように失敗したくないと思っていました。

でも、父は頑固な性格が失敗を招いた責任を果たそうとしているのです。

そして、人生を決して、あきらめてはいないのです。僕のために過酷な労働に耐えて僕の成功が父の成功になると言いたかったのでしょう。

僕は今、医者になりたいと考えています。それはかなり大変なことだと思いますが、僕はその夢が実現できると信じています。なにしろあの頑固な父の遺伝子が僕の中にあるのですから。



## 自信を持つことの大切さ

Esther Chun

みなさん、おはようございます。私はバーナビー・サウス高校の二年生エスダ・チョンです。今日、私は自信を持つことの大切さについて話したいと思います。グローバル化していく現在には、まず英語を身に付けるべきだと考えていた父のおかげで、私は五年前カナダに生まれました。最初はただ父に勧められただけでしたが、時間が経つにつれ、私の価値観は変わって来ました。言語だけではなく、その国の文化や習慣を身につければ もっと自信を持って生活できると思ったのです。

先日、狭いエレベーターの中で知らないおばさんに「Hello」と話かけられましたが、その時、私は「Hi」とも言えませんでした。外国人に慣れていなかったし、知らない人だから緊張してしまったのです。普通、韓国では知らない人には話しかけません。ですが、その日からカナダについてより深く考えるようになりました。「Hello」という一つの言葉でどのくらいカナダでの生活が変わるのか実感したのです。それが自信に繋がる最初の一步となり、その結果、色々な人と会うことができました。また、自然に視野も広がり、外国人に対しても不安がなくなりました。これこそ、韓国にいたら、学べなかったことでしょう。また、カナダにいても英語が下手だからと言って引きこもってしまうと全く意味がないでしょう。

私の友達に、最近カナダに来たばかりで英語があまり出来ない人と、他の人より英語がよく出来る人がいます。この二人がカナダ人に「あなたがたは英語が出来ますか」と質問された時、英語があまり出来ない人は「はい、私は英語が出来ます」と自信を持って答えましたが、もう一人の英語が出来る人は「私は英語があまり上手ではありません」と丁寧に答えました。みなさん、この二人の返事についてどう思いますか。質問をしたカナダ人はその後どちらと話を続けたと思いますか。どちらの英語力が上なのかはっきりしているのに、そのカナダ人は自信を持って返事をした方の人と話を続けたのです。ここで私が言いたいことは、エレベーターで会ったおばさんのことも、この友達二人のことも、コミュニケーションは英語自体ではなく、自信を持つことが大切だということです。アジアでは、謙遜することが大事だとされています。実際には出来ることでも、話し方によって自慢と思われてしまうこともあるからです。でも、ここはカナダです。もちろん、カナダでも自慢ばかりしてはいけませんが、自信のあることに関しては勇気を持って自分を表現することは大切だと思います。自分の力を信頼し、自信を持つことでさまざまな経験もでき、世界観も広がっていくと思うのです。

## 一人でいる意味

Elizabeth Yau

私を見て、みんな鈍くさくて、かよわい女の子だと思うようです。けれども、私はかなり強くて独立心旺盛な人間なのです。大変な時、私は悲しくてよく泣きます。でも、直ぐ立ち直ります。生まれつき強い人はいないでしょう。困難を乗り越えた後で、強く生きていけるようになるのだと思います。私もそうでした。

小学校4年生の時、両親が離婚しました。父が家を出て行ってから、生活に大きな変化がありました。父の室内履きを玄関に置いて父を待つ事もなく、父が帰って来た時、抱っこしてもらい事も、もうできません。父がいる所には母はいません。母がいる所に父がいることも、もうありません、家族で一緒に晩御飯を食べる事も永遠に無いのです。父の浮気が原因でした、両親が離婚した後も、争いが続き、間に立った私はとても悲しく辛い日々を過ごしました。家を離れたかったです。だから、外国へ勉強しに行くことにしました。育った所や家族や友だちと離れて、一人で遠い所へ行こうと決めるまでに、二年近く考えました。簡単に決められませんでしたが。でも中学2年生の時、カナダ行きを決意しました。そして、香港からバンクーバーに来ました。

あれからもう4年経ちます。バンクーバーには、私の生活を干渉する人がいないので、とても自由です。でも、だからといって、悪い方向に走ることはありませんでした。むしろこれ以上、母を悲しくさせないようにと一所懸命勉強しました。大学へ行って、将来は、会計士になろうと思っています。母を心配させないよう頑張って生きていきたいです。私の子供時代は他の人より、苦い経験が多かったですが、心の強い自立した人間に少しは、成れたと思うので、私は今の自分が好きです。でも、一人になって、家族の大切さが身に染みしました。一人になったからこそ、人は愛と思いやりがどんなに必要かも分かりました。良いことと悪いことは、いつも同じだけあると思います。だから、私は何か悪い事が起きても、誰も責めない、ぼやかない、頑張って楽しく生きていこうと思っています。

## 私はその気持ちが分かるから

Irene Hong

今、日本ではいじめが大きな社会問題になっています。たくさんの子供達が自分の肌のせいで、あるいは国籍や風習、宗教の違いなどで他の子供達にいじめられたりします。子供達に他人の気持ちを大切にすることについて教えても、理解してもらうことは難しいです。私も以前、他の子供にひどくいじめられたことがあります。

私が四つの時、私の家族は日本からアメリカに越して来ました。アイリンという英語の名前も付けてもらい、英語にも慣れて楽しく学校生活を送れるようになりました。でもそんな生活もわずか半年ぐらしか続きませんでした。私の韓国式の名前を見つけた同じクラスの子達がわざと変な発音で私の名前を呼びながらふざけ合うようになりました。その出来事は幾ら外見はアジア人であっても中身は他のアメリカ人と同じであると思っていた私にとって大変ショックなことでした。その後、私は決して自分の韓国名を他の人に教えませんでした。

カナダに移っていた小学校六年の時には、もっと酷いじめを受けることになりました。私はチャーハンが大好きでたまには母がお弁当に入れてくれました。

そんなある日、同級生の子が突然私の弁当を指して、叫びました。

“うわ！その匂いはなんだよ！おまえへんな物ばかり食ってるなあ”

瞬間、私の顔は真っ赤になり頭の中は真っ白になって、一言も言えずにただぼ～っとしていました。回りはし～んとなり、ついさっきまで私と一緒にしゃべりながら食事していた友達の誰一人も私を庇ってはくれませんでした。

その後、私の弁当にアジアの食べ物が入ることはありませんでした。私の弁当が変わったのに気づいたその子は、自分が勝ったと思ったのか今度は私の英語のアクセントを口実に、わざと変なアクセントで話かけたり、怪蔑的なあだ名を付けたりしながら私をいじめ続けました。このせいで私はすっかり自信をなくし、さらには自分が韓国人であることを憎むようになりました。なぜ私は他の子供達と違うのか、なぜ他の子供達のように“普通”じゃないのかといつも、いつも思いました。それから数年経って、やっとそのような疑問に対しても自分で答えを出すことが出来るようになりました。私も“普通”であると、しかも私は韓国と日本、そしてアメリカとカナダの文化的背景を遺産としてもらっているので、もっと開いた心でいろんなことを受け入れやすいと信じるようになりました。

ある日、学校で偶然にもアジア系の学生がいじめられている現場に出くわすことになりました。私はその両方の学生を知らなかったのですが、すぐさまいじめをやめるよう強く言いました。いじめっ子が去って行った後、いじめられていた学生は涙を拭きながら私に

聞きました。“なぜ知らない私を助けてくれたの?”、“だって、私はその気持ちが分かるから”と私が答えました。

そして、その瞬間分かったのです。人が他人の気持ちを分かるというのがどんなに感動的なことなのか、そして個々の小さな感動が集まれば社会も変えられる大きな力になり得るかということ。いじめられていた当時は大変辛い思いをしましたが、今になって考えるとその辛い経験を通じてとても大切なことを教えられたような気がして、かえって感謝したい気持ちです。そしていつか我々の子ども達は偏見と差別、そしていじめのない美しい世の中で幸せに暮らすことができると信じて疑いません。

高校生  
第19回上級

## ミニ・ジャパン

Cindy Kao

カナダは色々な国からの留学生が来ています。英語が上手に成りたいからだと思います。なにしろ、英語は世界で一番広く使われている言語の一つです。英語が出来たら、何処に行っても困らないし、世界がぐんと広がります。それなのに、どうして日本語がそんなに人気があるのでしょうか。その秘密は此処にあります。

私の母国語は中国語ですが、日本語の方が話しやすいと感じます。その原因はお分かりですか。今、私はカナダに住んでいます。でもまるで日本に生活しているようで。毎日、日本語の音楽を聞いたり、大好きな漫画を読んだりします。もちろん、日本料理も時々食べるし、面白いドラマも見ます。そして、学校で日本からの留学生もいるので、よく日本語を話します。日曜日、父と一緒に名探偵コナンを見るのが毎週のお楽しみです。まだそんな古いアニメを見ているのと笑ってもかまいませんよ。だって、新しいアニメを買うのにお金がかかりますから。しかし、テレビの日本語と学校で勉強する日本語が随分違いますよね。よく、先生から「ちょっと、その日本語は変だよ」と注意されます。とはいえ、漫画のお陰で漢字の力が強くなってきたり、日本語の聞き取りが得意になってきました。だから漫画は勉強にならないとは言えませんよ。

日本の文化はカナダ、特にバンクーバーで段々はやってきています。おそらく他の友達も同じ影響を受けているのでしょう。そして段々日本に興味を持つようになって来ているのでしょう。だから、日本語を取る人がどんどん増えていると思います。最初は本当にびっくりしたけれど、よく考えたら、当たり前だと思います。日本語を取る学生は大体アニメ・ファンとかJポップが好きな人ばかりです。友達の中でおすしが嫌いだとかは聞い

た事ありません。漫画も最初は英語版で読んだりしましたが、段々日本語版で読みたくなりました。だから、今は日本語版しか買いません。そして、段々日本語が分かるうち早く読む事ができます。皆さんもきっとそうでしょう。

これは私の学校だけですか。それとも、他の学校も同じか、よく分かりません。カナダにチャイナ・タウンがありますよね。次はジャパン・タウンを作り始めなければならないかもしれません。きっとたくさんの方が集まるでしょう。みんなはどう思いますか。

ご清聴ありがとうございました。

高校生  
第19回上級

## 1 リットルの涙

Misato Hamanaka

おはようございます。私の名前は浜中美里です。現在、ポートコキットラム市にあるリバーサイド高校の十年生です。部活動はバドミントン部で、学校以外ではスノーボード、陸上などと、色々なスポーツをしています。他にも、日本の武道に興味のある私は、六年前から剣道をしており、二年前には居合道も始めました。

このように、スポーツや武道が大好きで、日本の本などはあまり読む機会の無い私ですが、最近読んだ「1リットルの涙」という本にとっても感動しました。今日はその事についてお話ししたいと思います。

でもその前に、皆さんに一つだけ質問をさせてください。もし今日、小さな石にけつまずいて転んでしまったら、あなたは どう思いますか？皆さんは、「ああ、急いで歩くとあぶないな。」とか「今朝は慣れないハイヒールだから・・・」などと思うのではないのでしょうか。しかし、世の中にはそんな小さなことから人生が少しずつ変わっていった人もいます。

そこで、私が今日紹介するのは、十五歳で難病に冒され、わずか二十五歳の若さでこの世を去った木藤亜也さんのお話です。彼女は、今の私と同一年で脊髄小脳変性症という、手足や言葉の自由を徐々に奪われて、やがて、体の全機能が停止してしまう病気を発症しました。今でもその病気を完治する方法はみつかりません。

その病気のために、亜也さんは仲の良かった友人との別れ、せっかく入学した公立高校から養護学校への転校などと、色々な経験をしました。車椅子の生活の中で周りから嫌な目で見られることもありました。

そんな辛く悲しい日々の中、かすかな希望を求めて亜也さんは生き甲斐である自分の日

記の中にその思いを書き続けました。その日記には、病気との闘いの中で苦しかった時の自分へのはげましの言葉も綴られています。それは、実は亜也さんだけでなく、病気に苦しむ世界中の人々のはげましにもなっていたのです。家族の方も、このようにがんばっている亜也さんに支えられていたのだと思います。

そんな日記を亜也さんは手が動かなくなる瞬間までずっと書き続けました。そのノートの数なんと四十六冊にも及ぶそうです。このように、どんなに自分が弱くなっていても、他の人の役に立ちたいという一心で亜也さんは書くことをあきらめず、最期まで前向きに生き抜きました。おそらくずっと流し続けたであろう、その涙の量は題名どおり1リットル分、いえ、それ以上だったと思います。

しかし、もし私が亜也さんと同じ立場だったら、おそらく何もできずにいたと思います。不安に押しつぶされて、生きる希望も、楽しさも全部忘れてしまっただろうと思います。

でもこの本を読んで、私は亜也さんに生きる勇気と喜び、そして、健康であることに對する感謝の気持ちを教えてもらいました。

そして最後に、私が文中の亜也さんの日記で一番印象に残った詩を紹介したいと思います。

「いいじゃないか転んだって、また 起き上がればいいんだから  
転んだついでに仰向いて 空を見上げてごらん  
青空が 今日もお前の上に限りにく広がって  
ほほえんでいるのが見えるだろう  
お前は 生きてるんだ」

だから私も、辛いことがあってもあきらめず、つねに前向きに生きていこうと思います。

## 私の将来の家族と日本文化

Jia Yun Yan

こんにちは、ネリッサ・ヤンです。私のスピーチのテーマは私の将来の家族と日本文化です。

去年のクリスマス、私は初めてボーイフレンドの生まれ故郷である日本に行きました。一週間の滞在で私は日本文化に関する興味深い体験をしました。これから3つの経験を皆さんにお話したいと思います。

一つ目は日本の主婦と家事についてです。私は彼の家に滞在し、多くの時間を彼の家族と共に過ごしました。その中で気付いたことは彼のお義母さんが家事の全てを担当しているということです。料理、買い物、洗濯、掃除、皿洗い、全てです。お義母さんが家事の全てをしているのでとても申し訳なくなり、私は夕食後に皿洗いの手伝いを申し出ました。お義母さんはとても嬉しそうに「うちじゃ、誰も手伝ってくれないのよ」と言いました。その瞬間、私の頭をよぎったのは、もし私が日本で主婦になったら、「家事の全てをしなくてはいけないかも」、という不安でした。その後すぐに私は結婚したら将来の家事は分担すると彼に約束してもらいました。私は私のボーイフレンドを絶対に亭主関白にはさせません。

二つ目は日本の食卓での人間関係です。初めて家族で夕食をしたとき、私は彼から彼のお義父さんにビールを注ぐように小声で言われました。私はビールを人に注ぐことに慣れていませんでしたので戸惑いました。しかし彼から促されてお義父さんにビールを注いであげたらとても喜んでくれました。後で「助成は親や目上の者に対しいつも奉仕しなくてはいけないの？」と彼に聞きました。彼は「それは親や目上の者に対し敬意を表す一つの方法だよ」と教えてくれました。その日の夕食は私がビールを注いであげたこともあつてか、お義父さんは上機嫌でとても会話が弾みました。ただビールを注ぐという行為だけで人間関係が円滑になる日本文化を肌で感じました。

最後は有名な日本文化である内・外の関係です。お好み焼き屋さんにみんなで食事に行った時のことです。そこは、入り口で靴を脱いで入らなければならない店でした。私を靴を脱いで、店に上がる前にそのまま床に足をついたら、彼のお義母さんが「あっ」と声をあげました。私はすぐに間違いに気がついて「すみません」と謝りました。何故なら、カナダの大学で取った日本文化の授業で勉強した「内・外」の考え方を思い出したからです。汚れた靴下で、きれいな所にあがるのは「汚い」と日本人は考えます。それが表面的な「内・外」の区別ですから。そのとき、ふと私は、彼の家族に「内」として見られているのか、「外」として見られているのか心配になりました。人間関係でも「内・外」という区別があるか

らです。日本を発つ時、お義父さんに「ネリッサはもう家族の一員だからいつでも遊びにおいで」と言ってもらえた時に初めて自分は「内」の人間だと感じることができました。微妙だけれどとても大切な日本文化にドキドキさせられました。

これらが私の日本での貴重な経験でした。将来のお義父さん、お義母さんに温かく受け入れてもらう事ができて、とても有意義な一週間でした。さて、今度はいよいよ彼の番です。彼が私の両親に会いに中国へ行く番です。私の両親はとても厳しいので、かなりの覚悟が必要だと思います。のぶ君がんばってね！

大学・一般  
第19回初級

## 京都と大原訪れて

Arc Han

去年の五月に、私はランガラカレッジ主催の日本の仏教を学ぶ研究旅行に参加して、京都などを訪れました。私は伝統的な物が大好きなので、古い町を見たりして、この旅行をととても楽しみました。京都では歴史がある色々なお寺や神社を見ましたが、一番印象的な所は大原でした。

私は子供の頃、日本での留学経験のある叔父に強く影響をうけて、日本の伝統文学を読んでみました。まず、源氏物語を読みました。でも、母は私に“いい本だけど、あなたはまだ若すぎるから、もう少し大人になるまで、読むのを待った方がいいわね。”と言いました。私はもう十二歳だったので、母は少し過保護だと思いました。次に、叔父から中国語の平家物語の本をもらって、読んでみましたが、それはとても悲劇的な物語だと思いました。“祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり”という文がとても印象的でした。

そして、十五年の時間が過ぎて、ついに、私は京都に行く事になりました。京都での三日目の朝、カレッジから私達を連れて行ってくれた先生が“今日は大原へ行く”と言いました。大原という地名を聞いた時、私はちょっとピンと来ませんでした。でも、バスを降りた時、私はすぐに大原が好きになりました。そして、“とても美しい所だ”と私は感激しました。みどりの山々の中には静かな村があって、平和な印象を受けました。子供が田んぼの中で遊んでいて、泉が家のそばにあって、私はなんだか中国の自分の故郷を思い出しました。

そして、三千院という大原で一番大きなお寺を訪れた後、先生は“大原の寂光院はとても有名なお寺なので、訪れて見てください”と言いました。急に、私はこのお寺の事を思い出しました。寂光院は平家物語に登場する建礼門院が隠棲した所です。十五年前に平家



物語を読んだ時から、この場所を訪れるのが私の夢だったのです。

寂光院は思ったより小さかったですが、景色がとても綺麗だと思いました。庭の中に、枯れた大きな松が一本あって、私はとても気に入りしました。そして、松の前にある説明を読んで、この松の事が分かりました。それは有名な千年の姫小松でした。平家物語の最後のところで、後白河法皇が大原を御幸した時、法皇と建礼門院がこの姫小松の下で会ったのです。そして、大切な歴史の証人として、この松は千年の間、人々に尊敬されて来ました。しかし、二年前の夏に、この松は枯れてしまったのです。今、この松はまだこの静かな寂光院の境内の中にあって、“諸行無常、盛者必衰”という哲学を訪問者に教えています。

寂光院から出て来た時、もう夕方になっていました。日暮時のやさしい光の中で、村の人達が晩ご飯を作る匂いがしてきました。私は平和な田園生活に帰った気がしました。古い歴史と現代の生活の両方を持っている、大原はとても不思議な所だと感じました。

私はこれが日本の特徴だと思っています。古い伝統とハイテク、そしてその両方を楽しむ精神。これが私の日本が好きな理由なのです。

大学・一般  
第19回初級

## 小さな輪から

Marita Dautel

私は、二年前に約一年間、日本へ留学していました。留学中に、私が日本とカナダの学校で一番違うと思った事は、学校の雰囲気でした。

今日は、この違いについてお話したいと思います。

日本に行く前に私はオリエンテーションで、留學生活の様々な心配事について話を聞きました。彼らの話によると、日本ではすぐ友達が出来るが、カナダではなかなか出来ないという意見でした。しかし、日本に行くまで、私はこの違いが分かりませんでした。

日本では、私の周囲の人達は最初から優しく、親切な人達だと思いました。初めは、私は日本語が全然話せませんでした。しかし、日本の高校生は英語が少ししか話せないけれど、恥ずかしがらずに積極的に話してくれました。だから、友達もすぐ出来ました。さらに、日本に滞在中一番びっくりした事は、日本の学校では、クラスメートが毎日一緒に昼ご飯を食べて、話して、遊ぶことです。

私の経験とは反対に、私のホームルームから北アメリカに留学している人達が友達も出来ず、ホームシックにかかっていると聞いた時は、どうしてなのかとても不思議でした。彼女達の話によると、北米の学校では、友達のグループに入るのがとても難しく、溶け込

むのにも、時間がかかったそうです。この様な経験から彼女達は北米の生徒達は、あまり思いやりが無いように感じたそうです。私は日本の学校の雰囲気は、とても開放的なのに対し、北米は非常に閉鎖的だと思いました。

私自身、カナダ人は優しい国民だと思うけれど、どこを見てもそれぞれのグループを作って他の人達とあまり交流していない例が沢山あります。私はこの事実がとても残念です。文化、習慣、言語が異なっても、同じ国に住んでいる私達は、お互いに交流していかなければならないと思います。カナダ人同士がお互いの文化を認め合う事が出来ず、どのようにして外国人と分かり合う事が出来るのでしょうか。

私は日本での素晴らしい経験を常に毎日の生活に取り入れるように努力しています。色々な人達と話す事は、時々勇気が必要ですが、互いの文化や習慣の違いを越えて友達を作る事は、とても大切な事だと思います。その上、色々な国から来ている留学生との交流が深まれば、カナダに住む留学生がもっと楽しく充実した日々を送ることが出来るのではないのでしょうか。

私は、この様な小さな交流の輪の発展が、新渡戸稲造の言葉にもあるように「太平洋の架け橋」になると強く信じています。

大学・一般  
第19回中級

## 外来語拒否症

Connor Mayer

最近、数人の日本人のコメディアンが、テレビでちょっと変わったボーリングの試合をしたという話を聞きました。このゲームではボーリングをしている時に、「カタカナ英語」を使うと罰金を取られるそうです。この規則は、日本語の二つの特徴をはっきり見せてくれました。まず、カタカナ英語を使わないとなると、とたんに会話が進みにくくなるほど、日本語のなかに外来語が普及しているということです。そして面白いことに、外来語は和語や漢語よりも非常に目立つということ、つまり、名前の通りこの「外国から来た言葉」を日本人はわざわざ区別するという意識が強いことです。

もし、英語のネイティブ・スピーカーがフランス語からの外来語を使ってはいけないという規則でこのゲームをしたら、BOWLINGを始め、GUTTER、ALLEY、APPROACHなど、フランスからきた言葉を使ってしまうても、それらの語彙は本来フランスの言葉だとは気が付かないでしょう。それに対して、テレビに出ていた日本人のコメディアンは、カタカナ英語を使うとすぐに気が付いたでしょう。

外国語を借用するのはどの言語においてもごく普通の現象で、とくに珍しいことではありません。中国語にさえ、「民主主義」や「経済」など日本で作られた言葉が取り入れられています。しかし、どうして日本語では漢語や和語と欧米からの言葉をはっきりと分けなければならないのでしょうか。これはおそらく、日本語の文字の成り立ちと表記法の歴史に深い関係があるからでしょう。でも、漢語と外来語はどちらも、語彙を増やしたり不足を補ったりするという機能の点ではほとんど変わりがありません。その上、様々なニュアンスの違いも言葉の選択によって表せます。日本の地下鉄に乗ると誰でもすぐに気が付くと思いますが、国際的あるいは科学的という感じを与えるためか、「アンティ・グラビティー・ファージング・リフト・クリーム」などの長いカタカナ英語がよく広告に使われています。それに、和語よりも漢語のほうがフォーマルに聞こえる、外来語のほうが漢語や和語より格好いいと思われるという語彙の選択に関する意識調査の結果も出ています。ともかく、場面によって適切な言葉を使い分けるのが普通です。世界には様々な言語がありますが、日本語のように、三種類の違った表記法が共存している言葉はほとんどないということが言語学者によって指摘されています。だからこそ、日本語はどの国の言葉よりもユニークなのだと思います。私が日本に興味を持つようになったのも日本人によって作られたこの独特な言語文化に魅力を感じたからです。

しかし、ある評論家によって書かれた「日本語の可能性について」という文章には、片仮名の太くて簡単な線は物理的に和語と漢語から外来語を切り離すと書かれています。さらに筆者は、日本語は「何でも入れられるけど、本当は何も入れずに済むのです」と言っています。それはとても狭い考えでしょう。もし本当に何も入れなければ、日本語は面白くなくなってしまうと思います。ますます国際化されていくこの社会では、和語と漢語と外来語の区別は仮にあるにしても、それは単に言語そのものの変遷を反映する日本語の表記法上の違いだけで、互いに排他的なものではありません。ですから、外来語をあまり違ったものだと意識しすぎて、既に取り入れられた単語の使用をわざと避けようとするのは、少し不自然なのではないかと思います。

よく考えてみれば、欧米からの言葉は外来語と言われますが、漢語は伝来の歴史が長いので、同じ外国から来た言葉といっても、今では外来語とは思われません。一方、カタカナが外来語を表すのに使われるようになったのは、実は明治時代からだそうで、まだ1世紀半も経っていません。後何世紀か経てば、日本人は今の外来語を漢語と同じように日本語の一部として使いこなすようになり、外来語と言う意識もなくなるはずです。もしかすると未来の外来語は、他の惑星から来た生き物の言葉かもしれません。

## 大自然がくれたプレゼント

Emily Yu

皆さん、最近はお天気もよくなり、気持ちが良いですね。でも去年の冬、バンクーバーは11月から2回も大雪に見舞われたことや、冬の間これまで見たことの無い大暴風雨が何回もあって、それによってスタンレー・パークの何千本もの木が倒されたことを覚えていらっしゃいますか。実は去年、天候の異常が起こったのはバンクーバーだけでなく、ニューヨークや東京でも、百何十年ぶりに記録を更新するほどの暖かい冬だったそうです。このようなことが続くと、気候や自然環境がすっかりひっくり返ってしまいそうです。

地球の温暖化による気候の変動は、実はとりわけ新しい問題ではありません。ただここ数年、特にひどくなってきているので、やっと皆がこの深刻な問題に目覚めたようです。例えば、カナダの保守党を始め多くの政府が、ようやく1997年の京都プロトコールの重要性を認め、今までのように国の経済のことばかり優先するのではなく、温室効果ガスの排出量を削減することに協力する態度を示し始めたようです。また、あるイギリス人のお金持ちは、元アメリカ大統領のクリントン氏の支持のもと、温室効果ガスの有効な削減方法を見つけた科学者に巨額の賞金を与えるという少し変わった手段で、地球温暖化の問題を一日も早く解決しなければならないというメッセージを人々に伝えようとしてきました。

勿論、政治家や科学者達がリーダーシップを取って、対策を考えるのはとても良いことです。しかし、環境問題の改善は政治家や科学者だけの責任でなく、私達一人一人の責任です。私達は皆、現在と将来の世代のために、積極的に環境保全に参加する必要があります。カナダは天然資源に非常に恵まれているので、エネルギーの無駄遣いをする人が多いと思います。皆さんは、近くにあるスーパーにちょっとした買い物に行く時に、車でいきますか。歩いていきますか。また、冬の間、必要以上に暖房をつけていることはないですか。或いは、お湯をむやみに使うことはないでしょうか。科学者の研究も大事かもしれませんが、私にとって環境保全とは、生活様式を変えることです。例えば、セントラル・ヒーティングの代わりに、日本人のようにコタツを使ったら良いのではないかと思います。

しかし、生活様式を変えるということは、簡単なようでなかなか難しいことです。ですから、一番良い方法は、やはり子供の時からの教育です。皆さん、世界の平均気温がたった2度上がっても、世界に大きな影響を与えるということをご存知でしょうか。例えば、温度が熱ければ熱いほど、台風などの自然の災害も増えます。2005年のハリケーン「カトリナ」がその良い例です。もしも人々が、海水の温度と台風には関係があるということを知っていたら、それぞれ責任を持って、二酸化炭素の排出量を日常生活で最低限に抑えるように気をつけるでしょう。

現在のグローバル問題はテロや経済上の国際化ではなく、人類全体はどのように自然との調和を保っていくかということです。皆さん、大自然がくれたプレゼントである大切なエネルギーの使い方について、改めて考え直してみても如何でしょうか。

大学・一般  
第19回中級

## 軍隊

Hyungbin Kim

1950年6月25日、朝鮮戦争によって朝鮮半島が北と南に分断された運命の日以来、韓国の全ての男性は2年間の兵役に従事しなければならなくなりました。私も3年前、20歳の夏を境に軍に身を置くことになりました。私が配属されたのは、南北の境界線である38度線であり、そこはとても厳しい環境の土地でした。2年間の兵役生活はとても辛く、無駄だとも思いましたが、今ではとても貴重な経験であったと実感しています。

入隊した当時はすべてが悲慘でした。そこでの環境は、今までのものとは全く違ったもので、まるで別世界に迷い込んだようなものでした。韓国軍での序列は兵役年数で決まるため、自分より年下でも序列が上の者には敬語を使い、彼らに対して敬意を払わなければならないのです。多少の屈辱には動揺しないことが軍人として大切なことでした。

さらに大変なことに、年に2度、私たちは30キロほどの重さがあるバッグを背負い、60キロの距離を歩かなければなりません。これは、行軍と呼ばれています。8月の中旬に、始めて行軍を体験した私は、死にそうな思いであったことを覚えています。天候は厳しく、とても成功できるとは思いませんでした。しかし、みんなが互いに励ましあい、一人のケガ人も出さずにその恐ろしい行軍を終えることが出来ました。その瞬間私たちはひとつになり、韓国軍の行進曲をみんなで歌った時は涙が止まりませんでした。

寒い季節には山の近くで、一グループ4、5人で5日間生活しなければなりません。食料は少なく、夜には気温が摂氏マイナス20度を下回り、私たちは何も考えることが出来ないほど凍って、お互いの体を温めあっていました。私たちはとにかく、生き残らなければなりません。訓練の後の私たちは、人間とは思えない姿になっていました。この困難を乗り越え、私はいつでも、どこでも、何にでも、対応できる強い人間になることができたのです。

入隊している間、私は成長しただけではなく国家情勢の知識も築き上げ、なぜ韓国では軍隊に行かなければならないのかを学びました。そして朝鮮半島を取り巻く緊張状態を感じる事が出来ました。その一方で、私たちは、同じ民族であるのにもかかわらず、お互

いに銃を向け合わなければならないことが、私を悲しませました。また、両国が一つの国に統一され、より力のある国に生まれ変わるなら、それはどれほど良いことだろうかと思いました。

私は軍隊で生活した2年間に、心の底から感謝しています。もし、将来私が子供を持っていたら、軍隊に自主的に行くようにと、勧めます。たとえ2度と思い起こしたくないほどの過酷な日々が待っていようとも、私たちはもっともっと強くなれるのです。それはまるで、厳しい冬を耐え抜いた後の、生き生きとした花たちのように。そして、私は今現在韓国軍に仕えている人たちにとても感謝しています。

大学・一般  
第19回上級

## 日本食というのは

Paulina Chiang

皆さんは日本料理は好きですか。私は日本料理の中でも、特にお寿司が大好きなので、いくら食べても飽きないおいしい寿司が食べられるように、今すし屋でアルバイトをしています。食通というほどではありませんが、バンクーバーのおいしい日本料理屋を探して、食べに行くのも楽しみです。

今、世界中で、日本料理がブームになっています。健康的なイメージがあるからでしょう。ある調査によると、世界には日本料理レストランが2万5000店もあり、アジアと北アメリカは勿論のこと、南アメリカ、ロシアなどの国にまでたくさんあるそうです。また、ある新聞の記事によると、今ニューヨークでは懐石料理も大人気だそうです。

この日本食のファンが広がっている中で、日本の農林水産省は昨年、「海外日本食レストラン認証制度」を創設する必要があるのではないかと提唱しました。海外の日本食レストランの食材や調理方法などが、本来の日本料理とかけ離れているものが数多く見られるためだそうです。これに対して、賛成と反対、両方の声が出たようですが、今日は、私がこの認証制度について考えたことを、皆さんにお話したいと思います。

まず、認証制度の目的は何でしょうか。農林水産省のウェブサイトによると、日本食レストランの信頼度を高めることによって、日本の正しい食文化を普及させ、さらに日本の新鮮な「食材」や高度な加工食品の輸出促進を目的としているということです。しかし私からすると、この制度は本当に日本の食文化を普及させるためのものなのか、それとも経済的な動機によるものなのか、大きな疑問です。文化の面から考えれば、確かに日本人が外国に行った際には、これが日本料理と言えるのかと驚いて、真の日本の食文化を紹介し

なければと思う気持ちも分かります。しかし、農林水産省が言っているレストランの信頼度というのは、一体誰にとっての信頼度なのでしょう。その国に一生に一度、あるいはたまにしか行かない日本人にとっては、レストランに認証マークがついていれば安心かもしれないませんが、せっかく外国に行ったのなら、その国の食材や料理法に合わせた味付け、或いは創作された日本食を食べるのも、旅行の楽しさの一つではないでしょうか。バンクーバーに旅行に来る日本人には、ぜひ大人気のカリフォルニア・ロールや、焼いたサーモンの皮が香ばしいBCロールも召し上がっていただきたいと思います。また、信頼度の点からいえば、その土地に住んでいる人が信頼して喜んで食べていけば、それで良いと思います。

次に、承認制度の実行についてですが、その判断の基準は誰が、どのように決定するのかという問題は難しいでしょう。日本食には長い歴史があって、それぞれの土地に特有のもの、時代に合わせて新しく作られたもの、また外国から取り入れられたものなど、いろいろあるでしょう。例えば、「てんぷら」とはもともと、油で揚げるという調理法を表すポルトガル語ですが、日本料理の代表的な料理の一つになっていますし、ラーメンやカレーライスなど、外国から伝わってきた料理も今では日本人の日常生活に欠かせない食事になっています。また、カリフォルニア・ロールやBCロールのように、その土地の人の嗜好や食材にあったおいしいものや、めずらしいフュージョン料理などは、日本料理に取り入れるといいと思います。そうすることによって、日本料理はもっと多彩になるでしょう。

今の世界は、一つのグローバル社会が出来上がりつつあると思います。ですから、日本国内にも関東風や関西風などの地域による料理の味付けの違いがあるように、海外の日本食もこのグローバル社会の各地域に存在するそれぞれ特徴の違う料理と考えてよいのではないのでしょうか。つまり、料理は国境を越えるべきだと私は思います。

勿論、伝統的あるいは本物の和食を紹介することも必要ですが、認証制度を作るよりもっといい方法があるのではないのでしょうか。今、日本政府は、日本への観光を促進するために、「VISIT JAPAN」という宣伝をしています。認証制度の創設に使う予定の2.7億円の予算を使って、「本場の和食を味わいたいなら、日本へようこそ！」というようなコマーシャルをつくったり、日本料理の変遷やその文化背景を外国人に紹介するパンフレットを用意したりするほうが、海外のレストランに認証マークをつけるよりも、簡単かつ有効に正しい日本の食文化を紹介することができるのではないのでしょうか。

## ポップカルチャー国策

Kelly Liang

ポップカルチャーという言葉は、最近よく耳に入ると思いませんか。日常会話はもちろん、経済や政治などといった分野でもより頻繁に使われるようになったと、私は感じています。多くの演説で、安倍晋三首相は、「日本文化の世界的影響力を強化する」手段として、ポップカルチャーを国策として定位してきました。—アニメマニアの私にとって、それは本来喜ぶべきことですが、この政策には、いろいろな問題点が見られ、私は素直に喜べずにあります。日本政府はなぜポップカルチャーを国策にしたのか、そして、国策化されたことはポップカルチャー自体にどんな影響を及ぼすのか、私は考えてみました。

日本政府はなぜポップカルチャーを中心にコンテンツ産業政策を築き上げたのだろうか、と、経済産業省の公式報告書を見たところ、二つ大きな理由がありました。一つは、ポップカルチャーに将来日本の輸出を大きく支えさせることと、もう一つは「文化への尊敬を深め、日本のイメージ向上につなげること」でした。しかし、素晴らしく聞こえるこの政策は、国づくりの部分はあくまでもタテマエで、真の意図は、経済発展にあると思われま。なぜなら、同報告書に、文化に関する文章が現れる前に、数ページをかけて、アニメ・ゲームがバブル崩壊後の長い不況の中で着実な経済成長をしたことも、その先の経済潜在的能力も論じられていました。

現在もっとも景気が良いのはポップカルチャーだから、この分野をもっと発展させる方向を選んだ日本政府は、「経済発展のための文化」という資本主義的なコンセプトを推し進めている様に見えます。この政策は、つまり、「売れない文化は不要だ」ということになるのではないのでしょうか。ポップカルチャーと比べ、市場の広さも、競争力も劣っている伝統文化やハイアートが少なからず排斥され消えてゆく破目になるでしょう。そもそも、こんな文化資本主義は、文化の主体はあくまでも国民であり、国の役割はその足りない部分を補うという文化庁が多年にわたり守ってきた理念と反しているのではないのでしょうか。

先日、「ネギま!？」という人気アニメを見ました。その中で登場人物が外国人を捕まえようとするシーンがあり、そこで主人公が罠に富士山と芸者の写真を置きました。なぜそうしたかと周りに聞かれると、彼女は「今時こんな古臭くてバカなものが好きなのは外人しかいないでしょ」と自信満々に答えていました。このアニメの日本のステレオタイプから脱却したい志向が、私の知っているポップカルチャー作品の中で、しばしば見られます。そして、こういうアニメをもし外国人が見たら、「美しい国 日本」といった安倍首相の政治方針が達成されるどころか、差別傾向に失望し、和製ポップカルチャーから遠ざかる可



能性が考えられます。ですから、政府がもし本当にポップカルチャーを国策として持ち出すなら、今もっとも大切なことは、その内容を完全に把握することではないでしょうか。そうしない限り、ポップカルチャー作品内容の政治理念との不一致な部分が、日本の経済にも、イメージにも、そしてポップカルチャー自体にも悪影響を及ぼす恐れがあります。

アニメを含むポップカルチャーが、日本だけではなく全世界でも栄え、芸術の一分野として認められることが、アニメファンの私の望みです。しかし、ポップカルチャーを使って、国の経済成長しか目標としていない現日本政府のコンテンツ産業政策では、そんな未来が実現されないと思います。それゆえに、安倍内閣には、ポップカルチャー政策を考え直し、文化は売り物ではないということに気付いて欲しい。そう考えるのは、私一人ではないことを希望します。

大学・一般  
第19回上級

## 敬語は必要か

Jinhwan Kim

「ただ今より、スピーチを始めさせていただきます。どうぞ、ごゆっくりお聞きください。」皆さん、このような挨拶言葉をどう思われますか。多分、「この人はとても丁寧な日本語を習ったな」と思われる方が多いでしょう。私が日本語を習い始めた理由の一つは、アニメや漫画などが好きだからと言うよりも、相手を尊敬しながら自分のことを謙遜して話せる丁寧な日本語が、とても素敵に見えたからです。今でもこの最初の動機を忘れず、毎日、日本語の勉強に励んでいます。

しかし最近、「ちょっと、おばあさん、今何時?」、「おい、おじさん、ちょっと火を掛けてくれ」など、年上の人を尊重するべきだという日本人の考えを無視してしまうような、乱暴な若者の言葉遣いを毎日のように耳にします。つまり、敬語を使わなくてはいけない場合でも敬語を使わずに無礼な言葉を使い、時には相手の気持ちを傷つけてしまうような言動が氾濫しているのです。このままだと、礼節の大切さを反映している日本語の本質が失われてしまうような気がします。

日本では会社が新入社員に、電話のマナーや上司や顧客への適切な言葉遣いなど、敬語の訓練をさせるのが普通だと聞いています。これも日本の社会における敬語の重要性、そしてそれを無視する今の日本の若者にも敬語を身につけてもらうことが必要だということを示しているのではないかと思います。しかし驚いたことに、最近読んだある雑誌の記事によると、若い社員に敬語の使い方を教えるのではなく、逆にカジュアルな話し方を好む

若い部下に時代遅れと思われないように、もしくは仲間意識を持たせるために、若者の言葉遣いに合わせてしまう上司が増えてきたそうです。このような現象が広がると日本語、そして日本の社会はどうなっていくか心配です。

皆さんの中には、私の考え方はずいぶん古いと感じられたり、人間は皆平等だと言う西洋の思想から考えれば、敬語を使わないほうがむしろ21世紀の国際化の時代に合うのではないか、と反論なさる方がいらっしゃるかもしれません。私も言葉は時代とともに変わっていくものだという事には、まったく異議はありません。もったもな事だと思います。しかし、言葉は時代によって変わって行くからこそ、どのように変化していくかということには気をつけなくてははいけないと思います。敬語に関しては、日本語の独特な言葉遣いであり、また常に目上や外部の人に敬意をはらうという日本人の丁寧な国民性をあらわすものであるのです。昔のように、二重敬語、または必要以上に敬語を使う必要はなくても、やはり大事にすべきだと思います。昔から日本人は礼儀正しい民族だと言われてきました。敬語はその礼儀正しさの現れの一つで、日本人にとっては守らなければならない日本文化の一つだと思います。

確かに、敬語の使い方を身につけるのは大変です。敬語の大好きなわたしでも場面や相手によって、言葉遣いを変えなくてははいけないことに苦労しています。実はよく敬語とカジュアルな言葉をまぜたりして、間違いをします。しかし、日本語には敬語とカジュアルな言葉遣いの両方があるからこそ、相手に伝えたい敬意や親しみを込めた気持ちなどを、言葉を選ぶことによって表せます。それが私には何よりも魅力的です。このような思いを持って私が一生懸命勉強しているこの素敵な日本語の大事な部分を、日本人の方が忘れてしまうことになったら私はとても悲しいし、寂しいです。みなさん、この日本文化の一部となっている美しい敬語を大事にしていましょ。